

## 2010年の鉄スクラップ輸出の特徴と11年の見通し

### 目 次

Part 1	2010年の鉄スクラップ輸出	
1.	鉄スクラップ輸出入	
(1)	10年の鉄スクラップ輸出647万t、輸入49万t	1
(2)	輸出向け先の特徴—韓国が全体の50%、中国向けは半減	1
(3)	HS品目別輸出货量—高級くずの減少率高い	2
2.	主要マーケットの特徴	
(1)	10年の韓国向け—新断50万t変わらず	3
(2)	韓国における日本の位置—日本のシェア第1位	4
(3)	10年の中国向け—「雑品」とH2を主とした老廃くずが主	4
(4)	中国における日本の位置—日本のシェア1位返り咲き	5
3.	輸出減となった需給環境	
(1)	回復に向かった鉄鋼生産	6
(2)	国内市中スクラップ購入量の増加	6
(3)	需要増を越えきれない市中くず発生（回収）の伸び	7
Part 2	2010年の「雑品」輸出	
1.	通関コードの差異による推定	
(1)	鉄スクラップ通関統計における差異	9
(2)	銅スクラップ通関統計差異による推定	9
2.	10年の「雑品」輸出推計	11
Part 3	2011年の鉄スクラップ輸出見通し	12
(1)	2010年の年初予測と実際	12
(2)	2011年の輸出展望	13
(3)	2011年の価格展望	13

## Part 1 2010年の鉄スクラップ輸出

### 1. 鉄スクラップ輸出入

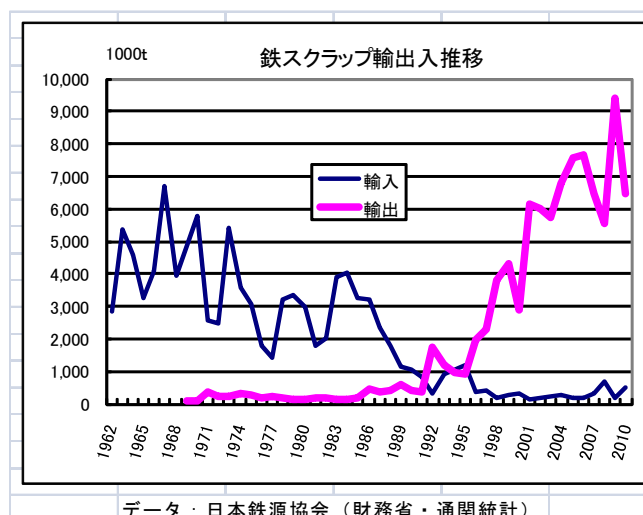
#### (1) 10年の鉄スクラップ輸出 647万t、輸入 49万t

10年の鉄スクラップ輸出量は647万t、金額は2,888億7,194万円、総平均単価44,630円/t、輸入は49万t、平均単価36,980円/t（注その他くず）だった。過去最高だった前年に比べると、量は294万t（31.2%）減少したが、金額では前年の3,083億円に対して6.3%の減少に留まり、3,000億円弱を維持した。単価が36%回復したことが大きい。

図表1 2010年の鉄スクラップ輸出・前年比

	重量1000t			金額000円			単価 円/t		
	10年	9年	10/9	10年	9年	10/9	10年	9年	10/9
輸出計	6,472	9,408	-31.2	288,871,936	308,318,580	-6.3	44,634	32,772	36.2

図表2 鉄スクラップ輸出入推移



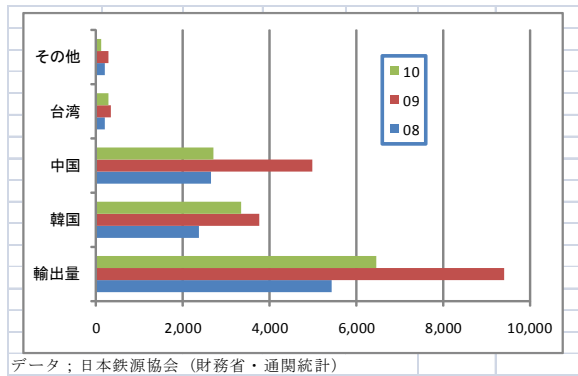
#### (2) 輸出向け先の特徴—韓国が全体の50%、中国向けは半減

647万tの向け先別では、韓国が334万tとなり全体の51.5%を占め最大マーケットとなった。次いで中国271万t（同41.9%）、台湾30万t（同4.6%）、その他12万t（1.9%）である。前年に比べ、韓国11.7%減、中国45.6%減、台湾12.6%減、その他59.5%減であり、中国の半減が目立つ。その結果08年、09年と続いた中国1位は10年になって韓国に代わった。しかし、韓国、中国、台湾3国のシェアは前年の96.8%から98%に高まっており、3国集中化は強まる方向にある。その他ではベトナムやインドネシア等東南アジア向けが注目される。10年のベトナム向けは7204-49-100ヘビー屑及び7204-49-900その他屑主体に6.3万t（その他の1/2）だった。しかしベトナム向けその他くずの単価は44,780円/tとなり、中国の54,340円/tに次ぐ高単価であることから、後で述べる「雑品」が入っていることが類推される（図表4）。

図表3 10年の主要向け先と推移

単位1000t、%

	輸出量	韓国	中国	台湾	その他
08	5,438	2,362	2,663	217	196
09	9,409	3,776	4,990	342	301
10	6,472	3,336	2,714	299	122
10年の前年比	-31.2	-11.7	-45.6	-12.6	-59.5
10年の対7	100.0	51.5	41.9	4.6	1.9



図表4

ヘビーくず及びその他くずの向け先別単価

HS7204-49-100 ヘビーくず

	重量千t	金額千円	単価円/t
韓国	1,057	33,893,299	32,066
中国	287	12,408,590	43,236
台湾	107	3,151,661	29,455
ベトナム	47	1,706,374	36,306
計	1,501	51,279,143	34,163

HS7204-49-900 その他くず

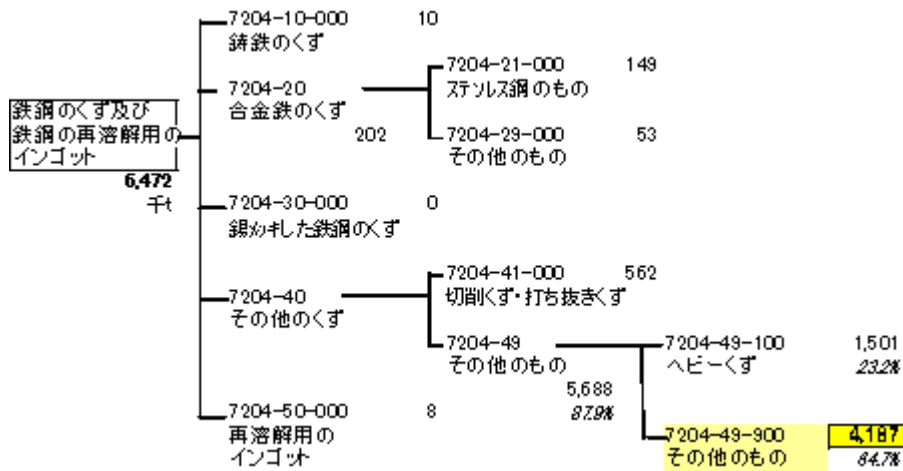
	重量千t	金額千円	単価円/t
韓国	1,639	52,585,287	32,084
中国	2,337	126,980,606	54,335
台湾	149	4,753,004	31,899
ベトナム	15	671,646	44,776
インドネシア	18	626,004	34,778
計	4,187	187,080,107	44,681

(3) HS品目別輸出量—高級くずの減少率高い—

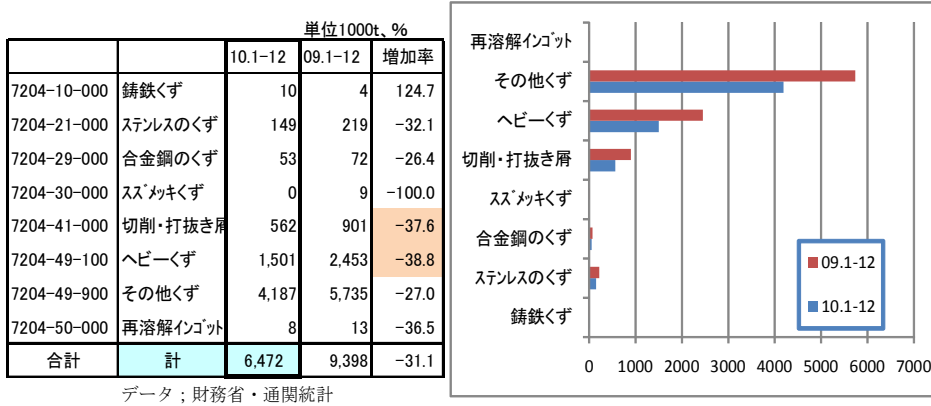
647万tをHSコード別にみると図5に示すとおり、その他のくずのうちその他のもの(HS7204-49)が全体の約88%を占める。うちヘビーくず(HS7204-41-100)23.2%、その他のもの(HS7204-49-900)64.7%である。「その他のもの」は汎用コードであるため、「雑品」(=銅付未解体の鉄スクラップ)が含まれている。

前年との比較では、いずれも高級くずである切削・打抜きくずとヘビーくずの減少率が高い。

図表5 鉄スクラップ関連HS品目体系と10年の輸出量



図表6 HS品目別前年比



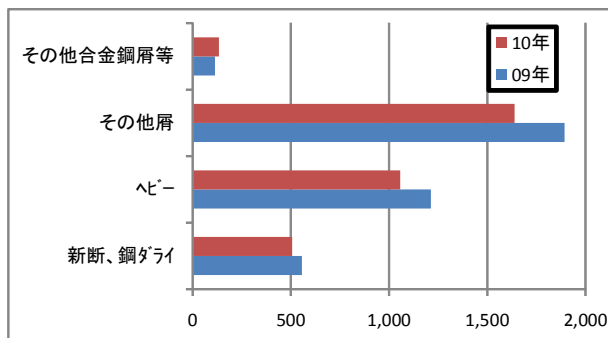
2. 主要マーケットの特徴

(1) 10年の韓国向け—新断50万t変わらず—

韓国向けは334万tとなり、全体が前年比31%減少したなか11.7%減に留まった。HS品目別にみると、その他くず（備考；H2以下の老廃スクラップが主体とみられる）が約半数、ヘビーくず（H2、H1クラスとみられる）が32%、新断15%、ステンレスくずを主とした其他合金鋼くずが4%である。前年と比べると品種構成に大きな変化はないが、新断は50万tを維持し減少率が小さかった（備考；ユーザーの固定化が推察される）。

図表7 韓国向け輸出内訳 単位1000t、%

	7204	7204-41-000	7204-49-100	7204-49-900	
	輸出計	新断、鋼グライ	ヘビー	その他屑	其他合金鋼屑等
09年	3,776	556	1,213	1,893	114
10年	3,336	506	1,057	1,639	134
前年比	-11.7	-9.0	-12.9	-13.4	17.5
9年構成比	100.0	14.7	32.1	50.1	3.0
10年構成比	100.0	15.2	31.7	49.1	4.0

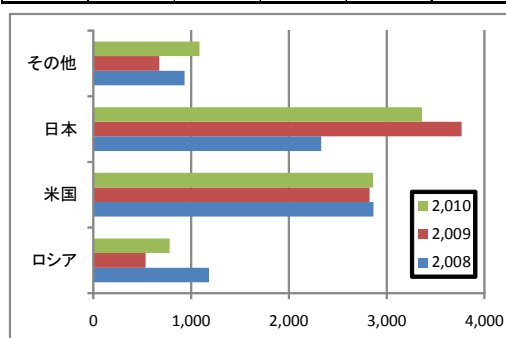


## (2) 韓国における日本の位置—日本のシェア第1位—

10年に韓国は世界から過去最高の809万tの鉄スクラップを輸入した。この輸入規模は、新規製鋼能力増大により920万tの輸入が必要とした年初予測（韓国鉄鋼協会他）を110万t程度下回る。韓国ではリーマンショック後内需回復にむかっているものの、マンション需要低迷が続き、年後半では電炉主体に減産をやむなくされたことが影響したと考える。しかし809万tは韓国にとって史上最高の輸入量だった。ソース別にみると日本のシェアが41.6%を占めて最大であり、次いで米国35.4%、ロシア9.7%だった。日本と米国で80%近くを占め、日本が主要ソースとなっている、ロシアは09年後半に輸出規制解除となったが08年ほど回復していない。その他ではメキシコ16.8万t、プエルトリコ14.4万t、オランダ10.4万t等がある。ここ3年間米国ソースは290万t程度で安定していることから、日本は最大ソースであるものの米国を意識せざるを得ない環境にあると分析する。

図表8 韓国の主要ソース

	単位1000t、%				
	ロシア	米国	日本	その他	合計
2,008	1,184	2,865	2,330	934	7,313
2,009	534	2,824	3,767	675	7,800
2,010	781	2,861	3,361	1,086	8,089
前年比	46.3	1.3	-10.8	60.9	3.7
シェア08	16.2	39.2	31.9	12.8	100.0
9	6.8	36.2	48.3	8.7	100.0
10	9.7	35.4	41.6	13.4	100.0



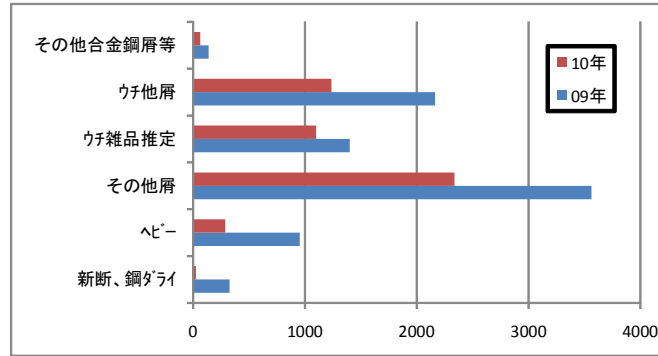
データ：韓国・通関統計

## (3) 10年の中国向け—「雑品」とH2を主とした老廃スクラップが主体—

10年の中国向け輸出は271万tとなり、前年より45.5%減少した。日本の平均輸出単価が32,800円/tから44,600円/tに36%上昇した（図表1）ことが大きく影響したと見られる。HS品目別では高額な新断、ヘビーくずの減少率が高い。もともと09年は特殊鋼電炉メーカーや高炉メーカーの減産により、新断や高炉リターンくずが中国に輸出された特殊事情もあり、「もとに戻った」という見方もできよう。なお、その他くずに含まれる「雑品」は09年比20%減の110万t程度と推計した（後述）。その結果、10年のHS品目別は「雑品」40%、その他くず（H2が主と推察する）45.6%となり、H2を中心とした老廃スクラップの輸出が主体となった。

図表9 10年の中国向け輸出内訳

	7204	7204-41-000	7204-49-100	7204-49-900			
	輸出計	新断、鋼グライ	ヘビー	その他屑	ウチ雑品推定	ウチ他屑	その他合金鋼屑等
09年	4981	326	954	3563	1400	2163	138
10年	2714	26	287	2337	1100	1237	64
前年比	-45.5	-92.0	-69.9	-34.4	-21.4	-42.8	-53.6
9年構成比	100.0	6.5	19.2	71.5	28.1	43.4	2.8
10年構成比	100.0	1.0	10.6	86.1	40.5	45.6	2.4



データ:財務省・通関統計

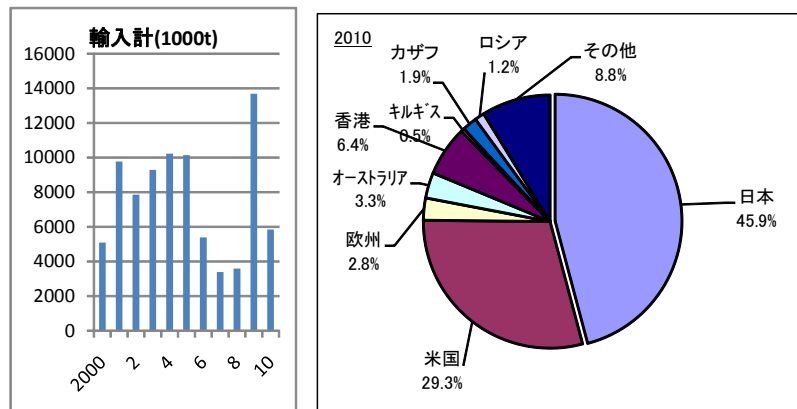
(4) 中国における日本の位置—日本のシェア1位返り咲き—

10年に中国が世界から輸入した鉄スクラップは585万tとなり、史上最高だった09年の1,369万tに対して6割近く減少した。粗鋼生産は前年の5億7,400万tから6億2,700万tに拡大する中での鉄スクラップ輸入6割減は、価格が購買力範囲であるかどうかにより、特に2006年以降そうした購入姿勢がクリアとなっていると推察する。

10年の供給ソースは、日本268万t(45.9%)、米国171万t(29.3%)、香港37万t(6.0%)、オーストラリア19万t(3.3%)、韓国16.5万t(2.8%)、カザフスタン10.9万t(1.9%)等でありロシアは7.3万t(1.2%)に過ぎなかった。ロシアは2000年時点で122万tあったが激減し、代わりに日本が2000年の64万tから268万tに拡大している。

10年の前年比では、欧州、オーストラリア、米国の先進国が65%から90%近く減少させるなか、比較的日本ソースの減少率40%は浅かった。その結果、10年の日本は供給ソース1位に返り咲いている。

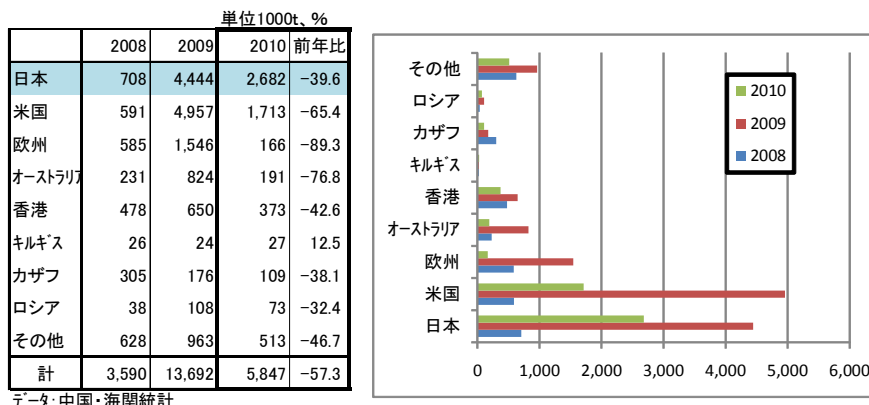
図表10 中国の鉄スクラップ輸入



データ:中国「海関統計」

備考:欧州はスペイン、ドイツ、スウェーデンの計

図表 11 中国の供給ソース



### 3. 輸出減となった需給環境

#### (1) 回復に向かった鉄鋼生産

リーマンショックで大きく落ち込んだ 09 年から 10 年は回復に向かった。製鋼法別にみると鋼材輸出に支えられた転炉鋼が牽引したが、電炉鋼も前年比 465 万 t 回復しており、この分は鉄スクラップ需要の純増となっている。また、市中くずを 40% 使用していると推察する鋳物生産も約 80 万 t 回復した。

図表 12 10 年の製鋼法別粗鋼生産

	単位1000t、%			
	転炉	電炉	粗鋼計	鋳物生産
2007	89,242	30,961	120,203	4,953
2008	89,238	29,501	118,739	4,797
2009	68,337	19,197	87,534	3,056
2010	85,756	23,845	109,600	3,828
09/08	-23.4	-34.9	-26.3	-36.3
10/09	25.5	24.2	25.2	25.3
増分量	17,419	4,648	22,066	772
08年比	-3.9	-19.2	-7.7	-20.2

データ: 鉄源協会

#### (2) 国内市中屑購入量の増加

10 年の国内市中くず購入量は、需給差を調整した修正ベースで 3,061 万 t となり、前年比 780 万 t 増加した。この内訳に電炉生産回復分 465 万 t と高炉メーカーの市中屑購入回復分及び鋳物生産回復分がある。高炉メーカーでは、減産下だった 9 年の転炉鋼スクラップ配合比は 13.1% に低下したが、①10 年初に鉄鉱石価格が 90% up となったことから市中屑購入が再開し、②秋にエコ車補助金制度終了の反動減を考慮した自動車生産減の影響を受けて一時購入を見合わせる時期があったが、③鉄鉱石価格契約が四半期単位となり、かつ 11 年 1-3 月は再び上昇となることを受けて、年間を通して 369 万 t (前年比約 200 万 t 増) となった (業界紙情報)。以上市中くず購入量増 780 万 t の内訳をまとめると、電炉生産回復 465 万 t × 歩留 95% と仮定すると 488 万 t + 高炉メーカー購入増 200 万 t + 鋳物生産

増分 30 万 t (77.2 万 t × 0.4) = 720 万 t でほぼ説明される。

図表 13 10 年の国内市中屑購入量

単位1000t、%			
	国内購入	過欠補正	修正国内
2,007	37,896	-680	37,216
2,008	38,062	-75	37,987
2,009	23,238	-423	22,815
2,010	31,061	-447	30,614
09/08	-38.9		-39.9
10/09	33.7		34.2
増分量			7,799
08年比	-18.4		-19.4

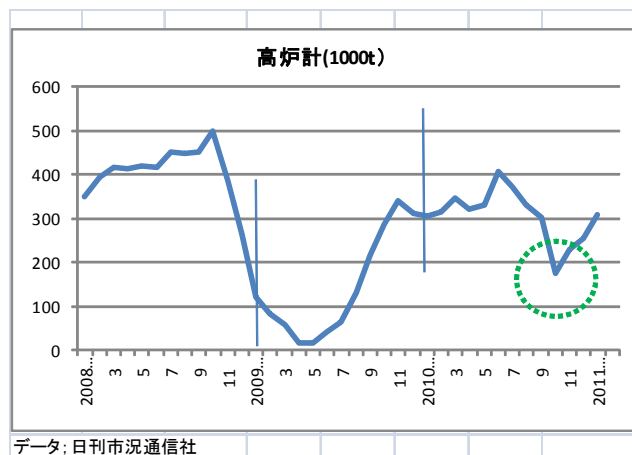
データ: 鉄源協会

単位万t、%		
	転炉	高炉メーカー
	配合比%	市中屑購入
2007	12.6	355
2008	14.3	492
2009	13.1	170
2010	14.3	369

データ: 鉄源年報、業界紙情報

図表 14 高炉メーカー市中くず購入量推移



### (3) 国内需要増を超えきれない市中屑発生(回収)の伸び

① 一方、国内市中スクラップの発生は、リーマンショックで大きく落ち込んだ09年から回復しているものの、その回復率は需要の伸びほど高まっていないと推察される。

発生を現すデータは存在していないので、今回は加工スクラップと老廃スクラップに分けて把握のできる鉄源流通量調査を利用した。これに輸出分をそれぞれ加えて総回収量(=総発生量)とし、前年及び08年の伸びを分析した。なお、直近の流通量調査は10年1-6月であり、2倍して1-12月とした。10年の場合、年後半になっても内需改善(流通量増加)の様子はなく前半をそのまま2倍しても問題は少ないとみた。

その結果、10年の輸出込加工スクラップ回収量は前年比17%増、08年比では15.9%減。同老廃スクラップは前年比19.7%増、08年比12.3%減、市中スクラップ計は同19.0%増、08年比13.2%減の水準と推察される(図表15)。

図表 15 10 年の国内市中スクラップの回収推計

単位1000t、%								
	流通	輸出	輸出込	流通	通関	うち	輸出込み	回収
	加工屑	新断	加工くず	老廃くず	輸出量	老廃50%	回収老廃計	市中くず計
2008	8,678	454	9,132	23,653	5,437	2,719	26,372	35,504
2009	5,663	901	6,564	14,622	9,398	4,699	19,321	25,885
10.1-12暫	7,116	562	7,678	19,632	7,008	3,504	23,136	30,814
10年/9年	25.7	-37.6	17.0	34.3	-25.4	-25.4	19.7	19.0
10年/8年	-18.0	23.8	-15.9	-17.0	28.9	28.9	-12.3	-13.2

データ: 鉄源協会「鉄源流通量調査」、財務省「通関統計」より作成。10年1-12は1-6を2倍



鉄源協会が行っている「鉄源流通量調査」は炭素鋼くずの品目別購入量を鉄源協会加入の鉄鋼メーカーに対して調査しているものであり、合金鋼くずや鋳物メーカー分は含んでいない。行政統計である国内市中屑購入量とは09年時点で14%程度の差がある（合金鋼くず3.5%、鋳物メーカー購入量10.4%）がメーカー購入量であることから、その挙動（伸び率増減）は鉄鋼生産に付随しているとみることができる。

そこで、図表12で現した10年の鉄鋼生産状況と比較すると、鉄スクラップを主原料とする電炉鋼粗鋼は前年比25.2%増加しており、国内市中スクラップの伸び19%増はこれに追いついていない。すなわち発生は回復したものの、需要の伸びほどは回復していないということが分析される。

② 引き続き建築解体活動の低迷；回収される老廃スクラップの中で建築部門から回収される鉄スクラップが約20%を占め最大回収部門となっている（鉄源協会「鉄源年報」）。しかし、建築解体の実態は、国土交通省の滅失調査（毎月建築物を除却する場合は除却主が都道府県知事に届け出、災害等により建築物が滅失または破損した場合は市町村長が都道府県知事に報告することになっている）があるが、申告制であるため全体を現わしていない問題点がある。

そこで、国土の狭いわが国では、除去しなければ新築できない環境にあることから、新築活動を把握することで、概念的に解体状況を類推することに繋がると考えた。鉄スクラップ回収に関係の深い鋼構造物の着工床面積をみると、9年（暦年）は前年比33.1%減少したが、10年は前年比2.8%回復した。しかしプラスとなったものの10年の08年比は31.2%減の水準である。このように国内の建築活動低迷が引き続いており、従って建築解体由来の老廃スクラップの回収も盛り上がり欠ける状況が続いていると解釈される。

図表16 低迷続く鋼構造新築着工

	単位1000m <sup>2</sup> 、%			
	鉄骨鉄筋造	鉄筋造	鉄骨造	鋼構造計
2008	4,952	35,568	59,181	99,701
2009	2,752	25,281	38,692	66,725
2010	2,819	25,194	40,609	68,622
09/08	-44.4	-28.9	-34.6	-33.1
10/09	2.4	-0.3	5.0	2.8
10/08	-43.1	-29.2	-31.4	-31.2

データ：国土交通省「建設統計月報」

## Part 2 2010年の「雑品」輸出

「雑品」輸出に関しては、本調査レポートで過去数回取り上げてきた。10年に関してもこの「商品」の輸出は途絶えていないが、国内発生の低迷と相次ぐ中国側の輸入規制により輸出量は縮小の方向にある。

### 1. 通関コードの差異による推定

#### (1) 鉄スクラップ通関統計(HS7204)における差異

同じHS7204において日中の通関統計に差異が存在し、その差異をもって「雑品」輸出量としていたが、09年2月を契機に変化が出現し現在も継続しており、差異による補足は困難な状態となっている。

差異は日本の輸出大、中国の輸入小の状態が09年1月までほぼ月間20万t前後で継続していた。しかし09年2月は突然0.2万tに激減し、しかも以降はマイナスを示す月が出現するなど、明らかに09年1月以前とそれ以降とは不連続な状態となっている(図表17)。この劇的変化の要因について推定の域をでないが次の点があげられる。

- ① 中国における増値税制度が厳格化し、その影響が出ている(業界紙情報)。
- ② 主要輸入港である寧波、台州では09年春ごろより「雑品」のうち家電OA機器類(=下級の雑品類)については、HS7204鉄スクラップとして通関するよう改められた情報がある(備考; 廃モーター、湯沸かし器、クーラー、配電盤などの工業系雑品は今までどおりHS7404銅スクラップとして入関)。
- ③ 環境保護や人的危害回避の動きがあり、管理が高まっている。

#### (2) 銅スクラップ通関統計(HS7404)差異による推定

一方、HS7404銅スクラップでは、日本の輸出小、中国の輸入大であり、鉄スクラップとは逆となっていた。すなわち日本の輸出HS7204時に含まれる銅付き未解体鉄スクラップは中国では、HS7404銅スクラップとして通関されていることの査証である。差異は07年170万t、08年170万tであり、前述のHS7204における差異07年180万t、08年195万tとほぼ一致する。このことから、日本からの「雑品」輸出量は、07年は170万t~180万t、08年は170万t~195万tの範囲と推定される。しかし銅スクラップにおいても09年以降、鉄スクラップでみた同様な変化が生じている。

差異07年170万t、08年170万tは、09年には37万tに、そして10年は0.9万tに縮小している。日本の銅スクラップ輸出量(主にハーネス類と推察している)はその90%前後(10年は92%)を中国向けが占めるが、年間30万t~40万tで推移しており、10年は前年比20.3%減(中国向けは17.8%減)、08年比では27.3%減(同26.7%減)である。輸出の低迷が引き続いているが、中国の日本からの輸入量は10年が現実に近いとすれば、それ以前はデータとして問題があったと思わざるをえない。

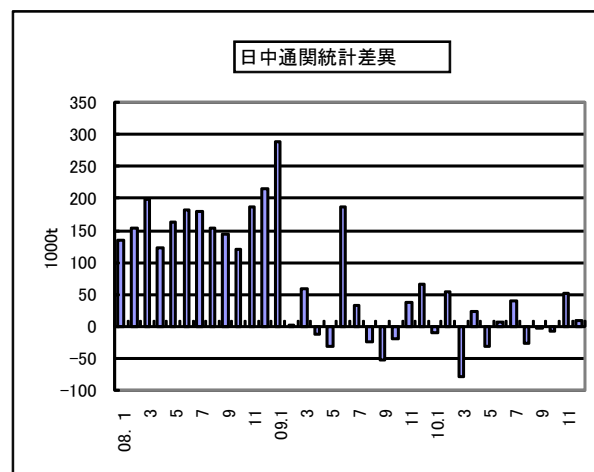
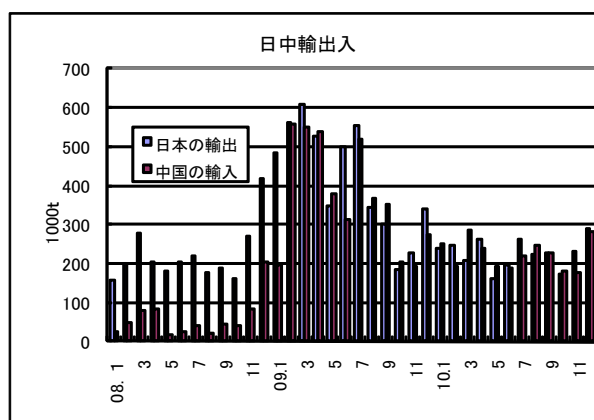
今後もお、鉄スクラップと銅スクラップに関する通関統計の差異につき観察を続ける

必要があるが、10年段階では日中間のデータ差異は解決してきていると考える。であれば、日本の鉄スクラップ輸出のうちその他のくずとして輸出されている「雑品」の輸出量は、中国において鉄スクラップとして輸入通関され、その後国内統計制度により別把握されていると推察される。日本としては、相手側の情報によるものでなく自らで判明できる制度改善が求められる。

図表 17 鉄スクラップ通関統計による日中差異

HS7204 鉄スクラップ		単位1000t		
	中国向け 日本の輸出	日本から 中国の輸入	差異(=雑品)	
08. 1	159	24	135	
2	202	48	154	
3	278	79	199	
4	205	82	123	
5	181	17	164	
6	206	25	181	
7	218	39	179	
8	175	22	153	
9	188	44	144	
10	161	40	121	
11	272	85	187	
12	418	203	215	
09.1	485	196	289	
2	560	558	2	
3	609	549	60	
4	526	537	-11	
5	347	378	-31	
6	501	314	187	
7	553	521	32	
8	344	367	-23	
9	301	353	-52	
10	186	206	-20	
11	228	191	37	
12	342	276	66	
10.1	241	250	-9	
2	247	192	55	
3	208	287	-79	
4	261	238	23	
5	161	193	-32	
6	195	188	7	
7	262	221	41	
8	222	248	-26	
9	226	227	-1	
10	172	180	-8	
11	230	177	53	
12	290	280	10	
071-12	2,325	507	1,818	
081-12	2,661	708	1,953	
091-12	4,982	4,446	536	
101-12	2,715	2,681	34	
07月平均	194	42	152	
08月平均	222	59	163	
09月平均	415	371	45	
10月平均	226	223	3	

出所：日本の輸出＝財務省通関統計  
中国の輸入＝海関統計



図表 18 銅スクラップ通関統計による日中差異

単位1000t、%

	世界へ 輸出計	うち 中国向け	世界から 中国の輸入	うち 日本分	日本との 輸出入差異
2007	423	381	5,585	2,071	-1,690
2008	395	360	5,577	2,060	-1,700
2009	360	321	3,998	694	-373
2010	287	264	4,364	255	9
09/08	-8.9	-10.8	-28.3	-66.3	
10/09	-20.3	-17.8	9.2	-63.3	
10/08	-27.3	-26.7	-21.8	-87.6	

出所：日本の輸出＝財務省通関統計、中国の輸入＝中国海関統計

## 2. 10年の「雑品」輸出推計

現状では主な「雑品」扱い業者からのヒアリング情報を取りまとめる方法しかないが、09年は、差異の存在した08年値を195万tとすると、3割減少程度の140万tと推定され、10年はさらに2割減の110万t程度（月間10万t弱）と想定される。

09年比2割減とした背景に3つ挙げられる。

- ① 国内発生低迷；10年の銅スクラップ（HS7404）の輸出減少率20%を適用した。「雑品」の発生源を産業系と家庭系に分けると、産業系を主体とする配電盤や湯沸かし器、廃モーターなどの上質「雑品」の発生が低迷しているため、無理に荷をそろえることから家電、OA機器類の割合と種類が多くなり、こうした雑多化が火災を誘発し、あるいは中国内の輸入規制強化を招いている。
- ② 15年ぶりとなる為替円高；中国における内需も好転しないまま（＝買値が好転しないまま）15年ぶりとなる円高が進展し、国内における中国人バイヤーの増加から集荷の過当競争も相まって、出し側の採算悪化となっている。
- ③ 中国での人件費up；入着後、解体や選別は人力が主だが、人件費が高騰しつつあって、さばききれないところが多い（在庫滞留している）。

現状「雑品」輸出事業は、バイヤーの増加と発生減、品質の低下による価格の低下、前述した中国の輸入規制強化のなか、わりの合わないビジネスに転換しつつあると言えそうだ。加えて家電・OA機器雑品にふくまれる小型家電について、政府はレアメタル回収の観点から小型家電リサイクル制度の検討に入っており、今後「雑品」輸出については縮小の方向に向かうと推察される。

### Part 3 2011年の鉄スクラップ輸出見通し

2011年の市中発生は、10年よりは回復に向かおうが08年を超える水準には至りそうにない。工場発生（自動車、産業機械類など）増にあまり期待は出来ず、建築解体の裏返しである新規建築着工に大きな起動力はあるだろうか。10年を08年比13%減とすれば、11年はその半分（5%～7%）の戻し程度と推察する。

一方、国内需要は、普通鋼電炉の回復に期待したいし、田原の稼働定着、鉄鉱石価格上昇に伴う高炉メーカーの購入増が加わる。また、韓国は新設した設備の稼働により2011年は製鋼用に09年の810万tを上まわる鉄スクラップ輸入が必要となるだろう。価格が購入の基準となっている中国は価格続伸が予想されるため購買力は低下し、10年の585万tはさらに減少する可能性がある。

これらの状況を踏まえると2011年の輸出は韓国基軸だった10年と変わらないが、国内需要対応が主軸となり、550万t前後にさらに減少すると予測する。

#### (1) 2010年の年初予測（2010年2月17日推計）と実際

	2010年	備考	2010年の実際
全体	発生10～15%減、需要15%～20%減に回復（前年比±0）	発生、需要とも回復に向かうがギャップは存在する。	発生09年比+19%、08年比-13.2%。国内需要+34%、08年比-19.4%
田原の稼働	+150万t～ （前年比+150万t）	能力は+250万t	+60万t～？
高炉メーカー	360万t～400万t（価格次第だが鉄鉱石は+方向・前年比+200万t）	09年10月以降30万t/月ベースを年換算	370万t
合計	+350万t		

年初の輸出量予測 2009年940万t ⇒ 940 - 350 = 590万t + 韓国向け（月30万t?） = 700万t前後（10年の実際647万t）

内訳

	2009年	2010年推定	2010年実績
ネット輸出	800万t	540万t	537万t
雑品	140万t	160万t	110万t
計	940万t	700万t	647万t

向け先(2010年初推計)	2010年初推計		2010年初推計		10年の実績	
	2009年	2010年	増減	シェア	10年の実績	シェア
中国	500	260	-240	37%	271	41.9
ウチ雑品	140	160	+20		110	
ネット	360	100	-260		161	
韓国	380	360	-20	51%	334	51.5

#### 10年初予測の根拠

中国向け；雑品は15%ほど回復。ネットは新断、ペーともに減、価格次第。07,08年の20万t/月ベースに戻る。  
韓国向け；ロシア次第。30万t/月で予測

## (2) 2011年の輸出量展望

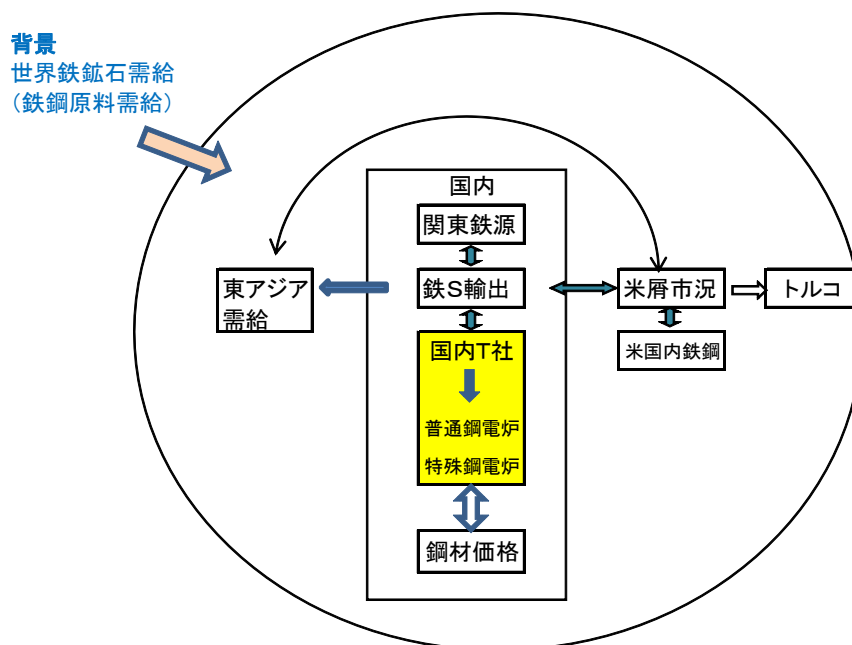
	2011年	備考
全体	発生 08年比 5～10%減、需要 08年比 10%減程度に回復（前年比±0）	発生、需要とも回復に向かうが需給ギャップは継続する。
田原の稼働	前年比+100万t～	田原のホットコイル輸出次第
高炉メーカーの購入	400万t～450万t（月間 35万tペース＝前年比+50万t）	鉄鉱石価格上伸の方向
合計	+150万t	

2011年の推定輸出量 2010年 647万t - 150万t + 韓国向け +  $\alpha$  = 550万t前後

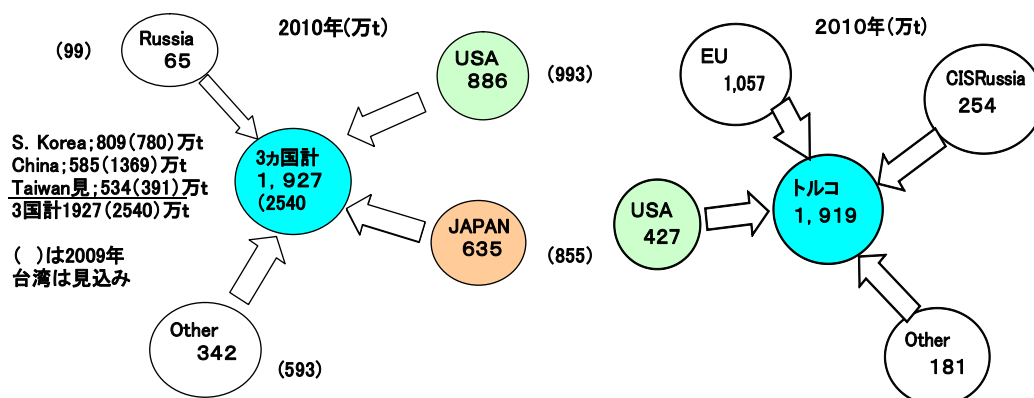
## (3) 2011年の価格展望—方向性を考察する材料として—

T社の生産スタンスにより先決していた国内価格は過去のものとなりつつあり、鉄スクラップ輸出が減少方向に向かっても、世界の鉄鉱石需給を主としたグローバルな構図から免れきれない状況にある。発展途上国を主体に世界の鉄鋼生産は増加の方向にあり、最大供給ソース米国は、東西2大マーケットに関与している。11年も米国主導の状態は続き、価格は強含みの方向に進む。しかし大きな価格の乱高下は11年内には考えにくい。

図表 19 国内鉄スクラップ価格を取り巻く構図



図表 20 東アジア・トルコにおける米国の位置 (2010年)



## 調査レポート INDEX

- NO 1 2009年2月 「雑品」輸出の現状
- NO 2 2009年6月4日 鉄スクラップ加工処理設備の現状
- NO 3 2009年7月6日 最近の鉄スクラップ輸出と09年の展望
- NO 4 2009年8月6日 中国向け輸出増は「雑品」輸出の回復?
- NO 5 2009年9月3日 「新断」輸出動向からみる減産期の原料購買に関する提言
- NO 6 2009年12月8日 09年1-10月の鉄スクラップ輸出と「雑品」の動向
- NO 7 2010年2月15日 09年の鉄スクラップ輸出の特徴と10年の見通し
- NO 8 2010年7月21日 鉄スクラップ発生の現状と10年度上期の見通し
- NO 9 2010年10月7日 10年10-12月期の鉄スクラップ発生見通しと10年の輸出展望

(ご希望の方は弊社下記ウェブで参照下さい。またご質問はメールでお問い合わせください)

### 調査レポート NO.10

「10年の鉄スクラップ輸出の特徴と11年の見通し」

発行 2011年2月23日

発行者 林 誠一

発行所 ㈱鉄リサイクリング・リサーチ

<http://srr.air-nifty.com/home/>

住所 〒300-1622

茨城県北相馬郡利根町布川 253-271

e-mail [s.r.r@cpost.plala.or.jp](mailto:s.r.r@cpost.plala.or.jp)

tel 090-8341-4966